

昭和55年2月1日 第3種郵便物認可  
平成21年12月1日発行（毎月一回）1日発行  
俳句雑誌 沖 第40巻第12号



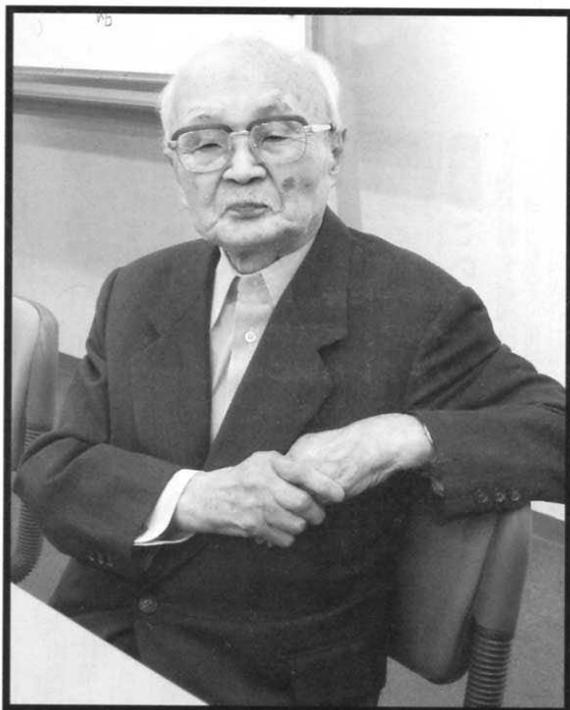
俳句雑誌[おき]

12  
月号

沖  
発行所

# 悼

沖最高顧問 林翔先生は  
去る十一月九日永眠されました（享年九五）  
謹んで哀悼の意を表します



平成7年11月30日撮影・市川市文化会館にて

冬日濃し

登四郎翔の

とこしなへ

能村 研三

一葉落つ

道貫きし

大き死に

水原 春郎

〔馬酔木〕主宰

# 夕ならひ

能村 研三

## 親交七十年

林先生のご葬儀で弔辞を述べるため、父と林先生の交友の歴史を纏うと『能村登四郎読本』を開いてみた。年譜によれば、昭和六年のところに、林先生のお名前が初めて出てくる。國学院大学の同窓として机を並べ、共に短歌誌「装填」で短歌を学んだという。登四郎二十一歳、林先生は十八歳。そして父が亡くなる平成十三年まで、実に七十年に及ぶ親交があつたことになる。勿論、我が家と林家は親戚以上の親交があり、私も幼い頃から親と共に林家を訪ね、お嬢様の朝子さん、ご子息の陽さんともよく遊んだ。父も林先生と共に、お互いの連れ合いより長い付き合いをしたことになる。

この間、短歌誌への参加から始まって、その後俳句を志し「馬酔木」への投句、そして昭和十三年に市川学園への赴任など常に一緒の道を歩んできた。

私を通つた小学校ではみよ子夫人が音楽の先生をされていて、直接音楽の授業を受ける機会を得た。中学・高校は市川学園に進学したので、現代国語は勿論、古典・漢文など国語

露 寒 や 女 に も ある 居 丈 高

水木洋子邸の庭

鴨 梨 は 作 家 旧 居 の 庭 柵 に

楽 譜 碑 に 音 な き 明 り 小 鳥 来 る

秋 暁 の ひ と り 時 間 を 後 退 る

冬の影兆す林家より電話

十一月九日林翔先生ご逝去

大いなる死を聞く電話冬月光

冬銀河翔先生の永久眠り

先生は和紙の軽さに夕ならひ

あるがままを綴る弔辞や冬日ざし

冬日濃し登四郎翔のとこしなへ

の授業のほとんどを林先生から受けたことになり、中学時代に初めて俳句を作ったのも林先生の授業からであった。

「沖」が創刊されてからは、前のお住居があった菅野のお宅へ編集の仕事を手伝いにお邪魔したことが印象深く残っている。

父と林先生の深く篤い七十年の親交が「沖」の礎を築いてくれたのである。



能村 研三

# 蒼茫集



枯野あかり

酒本八重

ざくと切る

成宮紀代子

鴨の来てぐいぐいと池引張れり  
窮鳥の入りし懐よりもみぢ  
師の灯す枯野あかりを踏み行かな  
枯れてより黙示のかたち芒原  
日暮れては朶山ふつと肩落す  
天高し猪と共存部落なり

日本の色

藤森すみれ

甲斐といふ男の国の村祭  
湧水に手を入れ秋思いづくより  
身に入むや湧水の音重ね聴き  
菊人形脇役に水ゆきわたり  
水澄んで本流となる谷こだま  
日本の色とも柿の信濃ぶり

新米の噴くよ野沢菜ざくと切る  
コロラチュラソプラノの歌満つ月に  
九十の母は九貫萩白し  
落葉焚き根方に灰を戻しけり  
庖丁に獣脂のくもり秋灯  
天平の礎石に座すや秋高し

地霊の宴

上谷昌憲

そこばくの地霊の宴曼珠沙華  
さも憂鬱さうに無花果熟れてをり  
エレベーター秋思は不意に垂直に  
橋くぐる船の扁平露けしや  
若沖の鶏の片寄る萩の雨  
葡萄食ぶ推理小説繰るやうに

うしろの正面

北川英子

武骨なる伊吹も薄ら粧へり  
鉦叩律儀すぎるも切なかり  
もう会へぬ人に「またね」と秋の暮  
梟のうしろの正面やはり顔  
黙々と菊焚く遠き地よりの計  
月光の漣なして砂漠なり

蛇

行

水上陽三

曼珠沙華百万本を抱き蛇行  
鬼の子のきりきり舞を見てゐたり  
新稲架の地を指す力頼もしき  
紫蘇の実をしごきぬ嫁せし娘来て  
名月や多摩は夜雲の湧くところ  
行く秋の潺湲と鳴るマンホール

大きな秋

松井のぶ

彩づきて大きな秋となりにけり  
台風裡生け贄となる日本列島

山茶花や集中力の散り易き  
北十字白鳥もまた十字飛び  
小春日和巖父賢母もすでに亡く  
パソコンに乗りおくれたる文化の日

時を形に

辻直美

満月の現れ刈りたての田が匂ふ  
毀つ家の土いきいきと天高し  
満月や火災報知器つく新居  
バリアフリーに蟋蟀もまだ鳴かぬ  
毛糸編む時を形にしてゐたり  
しんがりは空の出口や運動会

球形

辻美奈子

明日は伐るさくらもみぢとなりけり  
満月の球形ときにおそろしき  
括られてより乱菊のよく匂ふ  
子を枷とおもへば不意に萩の風  
葱活けて土の初めのつやつやす  
月光が降る切株のうすじめり

幕 間 千田 百里

幕間に幕なき秋意能舞台  
水掛けて菊人形の産湯かな  
死者生者つなぐ香煙秋澄める  
鶴来るや否やコンパス歩きかな  
星辰の軌道ゆるがず鳥渡る  
天空の過密も過疎も星月夜  
遠き目 安居 正浩

駅弁の中に小さな秋景色  
月明に流離ごころのなくはなし  
菓子にまづ見て栗の在りどころ  
釘付け上手に出来て敬老日  
紅葉の火照り鎮めの雨となり  
飛火野に立つ遠き目の鹿であり  
ピアノ教室 荒井千佐代

濁声の昼の鶏鳴ほうせんくわ  
秋すだれ嬰兒の白き足裏見ゆ  
庭より上がるピアノ教室あきざくら  
湯宿までけもの道ゆく秋早

一と鎌で断つ鶏頭の喉笛を  
厨まで来てゐる日差しくんち了ふ

二 番 線 森岡 正作

台風の眼が少年を魅惑せり  
二番線花野へ発たす一両車  
かすり傷舐れば甘しぬのこづち  
乱れ萩乱れに任す女人寺  
墨染の金木犀に紛れゆく  
婆よりも大き背負籠花すすき

豊 年 菅谷たけし

豊年のまんまん中のコンバイン  
九十九里われより高き野分波  
稿白き書斎のつるべ落しかな  
もう少しもう少し読む良夜かな  
ひとり起きぬて口乾く夜長かな  
焼芋を割つて頒け合ふ道の駅

分 水 嶺 久染 康子

飛行船の影に越さるる枯野中  
一本づつ揺れすすき原大うねり

赤とんぼ筋金入りの尾を張れり  
もみいづる房総低き分水嶺  
流木の片側乾く雁渡し  
月光が空の鳥籠射貫きけり

ひと揺れ

樋口英子

小津映画また巻きもどす夜の秋  
古文書の一行が解け秋深む  
硯洗ふ詩歌の道は美しく  
船着きてひと揺れ秋の深まれり  
水蜜桃己が重みに疵つきぬ  
名水で炊く新米の立ち上り

月の甲斐

望月晴美

青北風は燃ゆる入り日を急かしむる  
上りつめし45階秋気澄む  
月の甲斐こは父祖の地亡夫の地よ  
身にしむや写真の父母と佇つ大地  
秋天はあの頃のまま家無くも  
柳散る記憶の道を曲りけり

仮縫

秋葉雅治

山粧ふ奥に鋼の岩ぶすま

みの虫の蓑の仮縫仕立かな  
挑戦に耐へて野分の風力計  
木の間射る釣瓶落しの余燼かな  
出囃子に乗る真打の秋袷  
名作の文庫に化する秋思かな

五番街

松井志津子

点灯夫居さう霧濃き五番街  
離陸機の影の重たく花野過ぐ  
去ぬ燕駅に手書きの時刻表  
引く潮に砂締めゆく秋思かな  
秋の音する貝殻敷きの蟹の路地  
マリーナは海のふところ鳥渡る



# 潮鳴集



玩具箱

甲州千草

ゴムの木のいつも立派で敬老会  
草の絮玩具箱には蓋なくて  
地球儀のやうに回して巨峰食ぶ  
投げ入れの壺月光へ差し出しぬ  
長き夜の記録を移すC D版

再生

宮内とし子

今年藁積んでゆすつて又積んで  
血圧計に腕締めらるる敬老日  
筒切りの鯉の甘煮や野分晴  
縄文の甕棺小さし昼の虫  
再生を土偶に托し後の月

鐘

大沢美智子

快晴のまま夜に入り金木犀  
鐘の音に霧また生まる遭難碑  
北限の稲の金色短かけれ  
乾び鮭五百吊して父祖の梁  
子規庵の群竹さやぎ日の短か

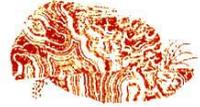
一人ひとり

古屋

元

秋燕や武蔵野線の大きな弧  
携帯の圏外に居り今年酒  
一人ひとり秋思の時間理髪店  
渡り鳥待つ空の色海の色  
へりコプタほ運動会を掻き回し

# 沖作品



## 能村研三選

かの言葉いま胸に沁む天の川

東京

藤原はる美

磨かれて土偶の乳房曼珠沙華  
指で唇封じこゑ聴く虫の闇  
ひとり居に青過ぎる空レモン切る  
核廃絶木犀にほふ朝刊に  
割箸のきれいにわれて鯨日和

市川市

鳥居 秀雄

秋天へ跳箱二段高くする  
教室の五十音図や鬼やんま  
蓮の実の飛んで悟空は水簾洞  
まんじゆしやげ団十郎の火焰隈  
葦の穂に没り日の重さありにけり  
磯百へ続くをどり場萩の風  
退く波に流す秋思のひとかけら  
茶筌置く指に居待の月にほふ  
海光をはじく風車や鷹渡る

愛知

近藤 敏子

やはらかくわが影とどめ草紅葉

千葉

峰 幸子

天高し三段跳の反り加減  
颱風過炎のごと燃ゆる空が見ゆ  
つま先にせまる山影走り蕎麦  
人も風もわれを追ひ越す秋の暮  
己が眼の色の湖へと鳥渡る  
小鳥来る単身赴任を解かるる日  
赤蜻蛉みすずの空を降りてくる  
身に沁むや波より低き殉教碑

岐阜

七種 年男

秋暑し島のマリアは海女に似て  
弟の神の一声水澄めり  
はつふゆや雨冠の字が集ふ  
呆気無き政権交代ひよんの笛  
心配の種がぎつしり石榴の実  
大阪が魔法にかかる颱風圏

大阪

望月木綿子

# 作品 15句選評

\*  
能村研三

核廃絶木犀にほふ朝刊に

藤原はる美

アメリカのオバマ大統領は今年の四月、「核兵器を使用した唯一の核保有国として、アメリカには行動を起こす道義的責任がある」と演説し、「核は冷戦時代の負の遺産」と、核の削減を訴えた。このニュースは世界を駆け巡り、日本は唯一の被爆国であるだけに、大変うれしいニュースであった。このことが大きな評価を受け、オバマ大統領のノーベル平和賞受賞が発表された。十月の初めのことであったと思うが、このニュースが大見出しになった朝刊が各戸のポストに配られた。作者自身も世界の平和を願う一人で、この新聞のニュースは木犀の香りと共に爽やかに受け入れることができた。

秋天へ跳箱二段高くする

鳥居 秀雄

小学生の頃の跳箱の授業を思い出す。跳箱を跳ぶ時の怖さ、飛べる段から一段積み上げて、今まで跳んだ事のない新しい段数の跳箱を跳ぶ時の緊張感が思い出される。自分が跳ぶ順番が来ると、跳箱を見つめながら精神集中し、しかし、「跳べるだろうか」「失敗したら格好悪い」等いろいろいるなことを考えてしまう。助走し、加速しながら踏み切り板の手前で歩数を合わせて「エイヤツ」と跳ぶ。時には歩数が合わなくて踏み切り板の手前で跳箱をよけたり、また時には、ふっと不安がよぎって集中力が無くなり、跳ぶのを止める事もあった。真つ青な秋天の中を二段高くされた跳箱に挑戦する時がきた。

退く波に流す秋思のひとかけら

近藤 敏子

どこまでも澄み切った高い秋空の下に、潮の色も真夏と違い紺碧の色が薄れて透き通ってくる。空が澄み渡るのに呼応するように潮の色も美しくなる。浜辺も、そこに寄せる波も、夏に比べると清澄である。やや淋しい感じがするが、秋の浜の寄せる波引く波には、哀愁が感じられる。そんな秋の波を見ていると物思いに耽っているものがかけらとなって流されていくように思えた。

やはらかくわが影とどめ草紅葉

峰 幸子

山から紅葉の便りが届く頃、平地では草の葉が少しずつ、色を変え始める。これが「草紅葉」。あまり目立つことなく、身近な野草にも草紅葉が見られる。齢を重ねると共に、自然から受けるやさしさも素直に受け止められるようになる。草紅葉に落とした自らの影がやわらかく見えた。自然と人間がうまく同化してきていることに気づいた時の思いであろうか。

(以下略)